

J 2.991:3

3 of 3

* Mojave, Vol. 14, Fall 1944

67/14
C

75
#

もはへ

文藝同人雜誌

四月號



モハベ第十四號

昭和十九年四月十五日發行

ホストン第三館府文藝同人社

目次

表紙

春の半日

月光の曲

茶の話

生格の善悪

初春の訪れ

外部移住の友を送る

文藝は人間生活を理める

晝休み

晩春の夜へ

モハベ俳句

モハベ川柳

第二キヤンペ句会

ホストン文藝板筆

總坂操筆お便り

コラド河に水鳥を見て 峰南生

モハベ歌壇

ホストン第三館府三一九九

神浦照洋

山根

長谷川生

門野番光速

安井騎兵

増本美篠

小樂

鬼谷子

松村とめ子

百合子

D. 49 48 46 46 45 44 40 37 36 34 33 31 26 11 2 1

春の半日

小根生

春まだ浅き彌生半ばポストン転住所では三館府合同で野馬
 を柵外に追ひ出す事となつた。最近野馬の跳梁甚しく野菜園
 は元よりバラツタ間や庭前に植えてある花苗迄も荒すので館府
 より一哩許り隔りたる処に柵を作りこゝより外に追ひ出すの
 てある。当日は我が第三館府からも三百有余の人々が出動し
 て受持ち区域から狩り始めた。又しが振りのそと出でて見る
 ものの悉くが快感を喫るのである。近頃出来上つた許りの漣漣
 用大ゲツチには水滴々として流れて居り、スキードの大森林
 は今將に春の装をなさんとし、奥の一部は我が農事部諸員の努
 力に依りノスキード樹は掘り倒され地均しも將に終らんとし
 て居る。吾等が鋤を握る時忽にして千里荒野は拓かれ春は
 彩華の香を湛へ秋は黄金の実を結ぶ。げに人力の偉大なるを
 今更なびら感歎せずには居られまい。こゝポストンの転住地
 と決るまで誰がこんな大沙漠のしつゝも鬱蒼たるメスキード
 森林の中に立派な新地が出来やうと想像したものがあう、
 この秋にはこゝから出来る野菜がメスキードの卓上を賑はすこ
 とであらう。
 要するに今日の企は指揮の不徹底と不用意の爲失敗に終り節
 角追ひ出した馬も人と人との間を突破して後方に逃げ去つて
 しまつた。野馬の群は毎夜館府の中に現れ相変らず野菜畑や
 花園を荒して居る。

小説 月光の曲 (続)

長谷川生

の月下ト聴いて感懐湧いて止まず何て作りし樂曲を隅々故郷
今音響絶えて不圖顧れば其所は自分等が當て住んで居た場
所の間近くまで既に來てゐたのであつた。直ぐ向ひに見え
家あの老松の陰の破家こそは、其後も雜作など全然加へられ
忘れ得ざる対照である。其後も雜作など全然加へられ
なはいらしく、軒は益々傾いて、外圍は総て荒るゝに見ゆ
である。松が枝洩る秋の月光に映ずるから美しいとも見ゆ
てある。松が枝洩る秋の月光に映ずるから美しいとも見ゆ
灯が朧かに居る。果して奈何か知らなうでも窓のうらけ今尚
理にど人びと居る。悪くはあらうかと思つて覗くと、部室の
隅にビロリと居る。兄の若い靴、靴底の修繕、先きのピア仲
り、話にその家のうであつた。おや、これに耳を澄して聞
く音、その位弾けたら中分ないでけなひ、俺など聞いて
オ、素晴しいもんだ。この樂曲はとて異ひのよ、私もつとく上
は、素晴しいもんだ。この樂曲はとて異ひのよ、私もつとく上
に、目よ兄さん！この樂曲はとて異ひのよ、私もつとく上
い、りたあ、のつ、口、ネ、市で開かれる音楽会へやつて呉れな

「ねー、兄さん可いでせう」
「そんな事を云つたつて、お前俺も困つてしまふな、俺もお前
に色々としてやりたい事は沢山あるのだがね、それお前も知
つて居るだらう」
「エ、それは能く知つてゐてよ、兄さん、亡くなつたお父さん
の借金のことですら」
泣かなくても可いよ、兄さんが今少し辛抱してすつかりお金
をえ拂つてしまへば誰に氣兼ねないからぬ」
と起ち上つて兄は妹の背中を軽く撫でてゐる。ヘートーベン
斯の美しき情景に思はず識らず見惚れて居ると、友は近く来て
見たかい、此處だつたの、居るかい？」

「麗人がいい」

「うん、頭腦も可い、素性も美しい、そうして氣立も優しい」

「さうで、天使のやうなんだ」

「ホウ、こんな汚い家に天使が居るのかい」

「織くとも僕に取つては、こんな貴い家はないのだ、僕は天使
のため、一曲弾いてやうと思ふのだ、君一緒に入らないか」

「そうか、では僕も天使のお顔拜見と出掛けるか」

「ヘートーベンは無限の想ひでノックした、内がうは正に阿母さ
んが出て来はせないかと思ふ程の感傷であつた」

「聴て二人は、どうぞと云ふ聲に扉をあけて入つて見ると、友に

は判らないが、ベートーベンには昔に愛する一室、今は若い靴屋の仕事場で客間を兼て居り、角にあるピアノも眞に古ぼけた壊れかけのつたもの、そうして唯一つ薄暗い洋燈が油煙に燦つた天井から吊してある。
「して貴方がたは、どう云ふお方でございますか」
「ハイ、私共は家外で美しいピアノの音を聴いてゐた通りが、
りのもので」

「ア、左様で」

「何です、この方はあなたのお妹さんで？」
「ハイ」

「失礼とは存じながら、今あなたの方のお話になつて居た事も実は一つ伺ひましたのです、アノ、妹さんはピアノの名曲を

聴きたいと仰有るのですか」

「ハイ、フランク市の音楽会へ一度で可いから出席したいと申しますので」

ベートーベンはこの婦人即ち故郷の音の我家で自分の作曲に浮

身をやつして居る優しき人こそ阿母さんの魂の化身ではない

かと疑はれずらるゝ想いで

「それなら失礼ですが、私がお聴かせしても宜敷うございます」

でも貴方、家のピアノはあの通りヤクザで、それに樂譜もございませんで」
「何に、樂譜がないと仰有るのです、で、何と云うもお妹さん
はあんなにお上手にお弾きになるのです」

「ハイ、それはあの……」

兄は次を言はずに黙つて了つた。妹はと見ると恥ひしやうに下を向いて顔を上げません。可哀想に斯の妙齡の優しき人は盲目なのであつた。それにして不思議なのは、この盲目な娘が何うして自分の樂曲を覚えたのであらうかとベートーベン是不審の眉をよせながら、妙なことをお伺ひします。あの、貴女はお目が御不自由なのに、どうして只今の曲と舊古な……しましたのですか。」

娘は漸く顔を上げて

「ハイ、實はあの……私共はこのボン市に参ります以前に二年ばかりブル市に居りました。その頃迄所にこの樂曲をお替古な……御夫人がゐらつて、毎日毎夜この曲を弾いてお出でになつてました。母は初めは何の曲であるか存じませんでしたが、どう云ふものでするか、そのピアノの音が響いてまゐりますと、何時もフランクとなつて其窓下をうろづき」

ベートーベンは不思議なこともあつたものだ。どうしても阿母さんの靈と關係があるのではなびらうかなど考へつゝ、熱心に聞いて居ります。

「斯様にすること度重りて、とう／＼耳だけで此曲が覺はつたので御座います。そうして段々と伺ひますと、ベートーベンのお創作になつたあの樂曲だそうで……」

「へ、聞いた丈で覚えらるるものですかね、驚きましたな」

「はい、どうやら」

6

「それなら僕が弾いて上げますから聴いてお出でなさい」
「どうぞお願い致します」

ベートーベンは頷きながらピアノの前に坐つた。一同は聴耳を
立て、注意をして居る。そうして其最初のタツチを聴いた途
端、妹は「オ、ソ、このお方は？」自分か弾くことが出来るので
直ぐ氣に付きました。それはその答で、苟も世界の名人とが
音樂の天才と云はれるベートーベンが、此處は幼時の我家で
あつたといふ感激に燃えつゝ、一心込めて弾くのですもの。思
ひかう答がない。何と云ふ美しい音色でせうかと胸に手をあ
て、じつと耳を澄す。平素妹の弾くのを聴いて居る兄は、ハナ
今夜のこの不思議な来客の弾くピアノは全く違つて居るよ
うな、こんな波のピアノ、いらあんな美しい響調が出るものであ
る。と怪しむながら一生懸命聴いて居ります。彼も、ベートーベンの指は
鍵盤の上を走り樂の音は愈々美妙を極めて益々滑らかに夜の空
氣を振動して行きます。折しも窓外の樹葉を渡ると思えし一
陣の秋風や何処からともなく室内に吹く込んだから堪らない
唯一つの洋燈の灯は不意にあふられて消えてしまつた。
「オ、ホ、ベートーベンは思はず弾く手を止めた」
「今直ぐ灯をつけますと起ち上つた靴屋を友人が止めて
「照りないで可いです」ととピアノの据付けのある傍の窓を一
い押し開くと、風と射し込む月の光がベートーベンの顔に胸に又手

にも水のやうに流れる。樂譜なしに彈奏して居たのであるが、
う洋燈の灯が消えても差えへないのであるが、突発した環境の
變化にベートーベンに急に無我の陶酔を破られたのであらう、
手はその儘鍵盤の上に留め、稍々仰いで窓外の月光を凝視しな
がら、黙然として深き思索に陥つたらしい。友は又始まつた
なと思つた丈であるが、兄妹は尊嚴の意氣に打たれたらしく、
暫くして後目の見えない妹が恭しく跪くと、兄の靴臺がベート
ーベンの側ににがりよつて。

「あの貴客さまも貴方はこのボン市のお方でございませうか。」
「そうです。」

「つひでお見掛け致しませんでした。このボロピアノからあの様な
音響を奏す貴方は尋常人ではありません。どうぞ妹のため
に御石を教へて下さいます。」と頭を垂れる。

「幸し御名前を知りて頂きたうございます。吾は今夜と云ふ
今夜こそお影さまで眞実の樂曲を聴かせて頂きたい。貴方
が若し此の市のお方なら、それは屹度あの維納へ行つてゐらつ
しやると噂のあるベートーベン様に相違ございませぬ。ベートーベン
様でなければ斯程の御彈奏の出来る筈がございませぬ。どう
ぞお名前を。」
「それ程までに御有るなら申上げます。私はお察しの通りベート
ーベンです。」
兄「エッ!!」妹「まあ、あのベートーベン様で!!」

兄妹はベートーベンの手に縋つた。樂聖の両手は二人の涙と接吻に濡れた。

「私はこれで失礼します。お邪魔を致しました」ベートーベンが起ると兄妹は「是非もう一度」御生でございますもう一度お聴かせ下さいませ」交互に二人は泣かんばかりに取纏つて歸らうとするベートーベンを元の座へ引き戻さうとします。ベートーベンも昔の貧困であつた所も所、貧乏此家での住居を偲び出て、心は何となくこの可憐の兄妹に魅きつけられ、殆ど涙ぐましく許りの感激に燃えて又ピアノの前に坐りました。晩秋の良夜は漸く更けんとして、ボーン市郊外の静寂は將に深く、稍々傾きたる月は今松が枝を離れて、弊屋の窓より青白き光を益々溢々瀲灩ぎ一家は鎮まり返つて霜の朝のやうであつた。で、降り瀲灩いで居ります。私の愛する月の光が黄金の雨のやうに此處へ降り瀲灩いで居ります。私は月光を満身に浴びて居る。この私の清爽の心境をピアノの音色の上に表現して見たいと思ひます。聴いて居て下さい」

急ふ急ふと、ベートーベンの指頭がトーンと一つ鍵盤に觸れ、また、弾き出す一曲の要は響へば月の昇る静かな穂かなな行きの、どつと嵐の吹き寄せ来る如き響き、ううかと思ふと咽び泣く様な時雨の音、唯もう聴くもの、心をうつとりと好い氣持にさせる。兄も妹も友人も齊しく首うなだれて、只管ベートー

ーベンの神韻縹渺たる巧妙の弾奏に聞か惚れて居た。所が急に弾奏を止めた。ベートーベンは俄に起き上つて、歸り仕度、どうして皆さんさようなら。

妹は怒めしそくに「まあ、もうお歸りでございませう」と別れを惜めば、ベートーベンも可哀想に思つたので。

峠度まで来て上げます、そうして替古をつけて上げます。今晩はこれで失礼致します。と言ひ残して、アイと戸外に出た。友は又少々日和が衰つたなと思ひつゝ、静に後から急ぎ続いた。ベートーベンは大急ぎで友達の家へ戻ると、一室に引き籠つたり、口も利かず一心不乱にペンを走らすのみである。ルドウィヒは何うしたと云ふのだらう。可怪な男だな。友達は多少氣に懸るので、夜中過ぎに起き出て窓口にベートーベンの部屋の前まで行つて、鍵穴から覗いて見ると相愛らずペンを走らせて居るのである。「バデナ、彼の男は余つぽど眞剣になつて居るが何を書くのであらう。才あ当分放つて置く方が可いであらう」と引返し寢床に這入つたが眠らねない。「あの男は小さい時からあんな風で他人と違つた所があつた。併し親思ひ兄弟想ひ友人思ひでとても人情深い男である。今晚もあの靴屋の妹に心から同情して居たらしく、自分から進んで弾奏して聴かせた。認だが、一体どうしたと云ふのであらう。可しもう一度行つて見てやらう」と時計を見ると早夜明け前、寧ろもう着物を着換へやうと身を整へて居る中に暁の光が窓から覗く心地よさ。

颯爽としてベートーベンの部屋の扉を敲くと元氣のよい晴やかな聲で、「どうぞお入り」

「どうしたんだい昨夜はちつとも眠らなかつたではないか」

「よく知つてゐるわ」
 「知つてゐるよ、僕は君の健康を害してはと幾度も部屋の前まで容子を見に来たのだが何時も君が余り一生懸命にやつて居るの、聲を掛けなかつたまでだ、一体何を書いたのか」

「漸く出来たのか、阿母さんへのお土産が」

「へえ、お土産だつて？」
 「さうだよ、僕は昨夜あの靴屋の家で月光を浴びながら無限の想ひに耽つて居る中に、ふいと樂想が湧いて来てね、それから弾いて見ると実に素敵なんだ、僕は近頃あんまり愉快な演奏をしたことがないで早く飯つて忘れたい中に書きとめて置いたね、それであんなに急いだのだ」

「成程それによく判つた、併し一時は氣でも違つたのではないかと心配したよ」

「さうであつたや、それは有難う、併しまあ飲んで呉れ給へ、今朝はたになつて、すつかり出来上つたよ、僕はこれに「月光の曲」と名を附けた、早速阿母さんの所へ行つて報告する積りだ」

「まあ、名！さう慌てることもないだらう、これからやつくり一眠りして、今朝飯を食べてからにし給へ」
 「いや、僕は今直ぐに行つて来るよ」

ベイトトベンは出来上つては、の共同墓地を訪れ、母親の墓標の前に佇ちました。早曉のこと
の廣く聖域に未だ一人の影を認めない。朝霧籠る鮮やかな空
氣の裡に、斯の月光の曲を母の墳墓に捧げ、その前に額づいて生
ける人に物言ふ如く、何時までも何時までも……（終り）
挽来五十餘年夢 歸去田園養性眞
萬事不求風月外 茫々天地一閑人

茶の話（五）

門野普光述

臺子の事

茶席の中で使用する道具の中で、尤大切に最初に出て来る
ものは、何といふても臺子でありませう。この臺子は、木だ、燼
及び風爐の用ゐられ、なつた以前からあつたもので、即茶道
根本の道具の一つであります。

御承知の通り、最初の茶事は皆この臺子の手前でありまして、
即舶来品の臺子、又は之を模したる日本製の臺子に由て行は
れたものであります。この臺子には、眞の臺子、草の臺子、即
竹臺子、及び高麗臺子、其れより後に江岑棚といふ臺子、
ひのものも出来ました。然し臺子を論ずる場合には、どうして
も眞の臺子（全部職色塗）を基本とすべきもので、例へば梨子地
臺子、蒔絵臺子、青貝摺臺子、或は爪紅等の臺子もありま

が、要するに、皆眞の臺子の變形であります。

この眞の臺子（蓋置）は、皆眞といふて茶道具（水指、金、風爐、建二日

水、柄杓立、蓋置）が一通り揃ふて居らなくてはならないの

であります。この揃つて居る道具とは、水指は青銅の共蓋、

風爐は鉄、金は申す迄もなく鉄で、通俗に切掛或は朝鮮風爐

といふて、金と風爐とがさつしりかゝるやうになつて居ります。

また、この風爐の前には口があり、肩込に少しの火燭抜きがあり

ます。この風爐は五徳を要せず、五徳なしに風爐の上に釜が

さつしりかゝるやうになつて居ります。次に柄杓立、これも青

銅、建水も同じく青銅、蓋置も揃ふて居る青銅で、之を皆具

といひます。この六つの道具の臺子の下の棚に順序よく飾ら

れて、其上の棚には、場合には由て、茶入、茶碗、又は茶杓を飾り

其前に座して主人が茶をするのであります。

この皆具の破格變化したものが後世に作られて、風爐が大口

の風爐となり、或は唐金風爐となり、又、水指が南蠻焼とな

り、蓋置が竹となり、建水の曲物となり、柄杓立が陶器とな

るやうな有様で、其の變化は極まる所を知らぬやうになつた

のであります。要するに之は皆根本皆具の眞の臺子の手前

の乱れたものであります。

竹臺子、高麗臺子等に於ては眞の臺子程に嚴重ではない。そ

れ、適宜に應じて變化のある道具を使用して、茶事を行ふこ

とになつて居ります。

臺子の手前は最初の茶事でありまして、後には冬は爐を切り
 夏は風爐を用ひます。爐の場合には臺子を使用するにも、下
 の棚は水指と柄杓立とを飾り、上の棚には茶入、茶碗、柄杓
 等を飾ります。夏は風爐、水指、其他前記の道具を飾ること
 になつて居ります。
 然しこ此等臺子の手前が余り四角張つて行々しいといふ感じ
 からは、利久時代以後には、儀式の時丈に臺子を用ゐ、他の場合
 には、代ふるに、色々の棚及び卓等が出来ました。例へば、
 利久丸卓、高麗卓、桑小卓、三重棚、二重棚、其他沢山な事
 であります。凡て大抵は下に水指を飾り、上に茶入を飾り、平
 面的に道具を陳列する代りに立体的に道具を羅列するのであ
 ります。これと先づ臺子及び棚の大略を申上げましたが、尚
 この外に板といふものがあります。板には長板、大板、小
 板の三種があります。
 こ此も初めは臺子の變化したもので、即ち長板は臺子の地板丈
 を持来つた形で、大板はその半分位のものであり、小板は尚
 小さいものであります。
 この板類は前の棚とは異なり、凡て平面に陳列するもので、下
 度臺子の地板と同じやうに道具を置き、大板、小板も亦之に準
 じて具数を減らすものであります。

金の事 附水の事

爐及び風爐と共に茶を煮るに尤大切な釜の話をいたしませ
 う。釜はいふ迄もなく水を沸すもの。即湯を沸す釜でありま
 す。この釜で沸した湯で茶を煮るものである。古来茶室
 に於ける重要な器として扱はれて居ります。この釜は先づ出
 来得る丈久しき間湯を沸し、十分に鉄氣の去つてあるもので
 なければならぬ。これは重要な第一條件であります。
 假令、其釜に数十金の値があるとしても、亦有る珍寶の釜
 であつても湯を沸かし其湯の味が茶を煮るにふさはしくな
 い釜であるならば其釜は茶室に無要であります。故に故人は
 其釜の湯の味が優れて居るといふ事によつて、釜の良否を決め
 て居る。
 或茶人が自ら求め来つた釜があつて、其釜をひけて茶を飲ん
 で見たい爲に、毎日三度や四度も水を代へては湯を沸かし、遂
 に満足の状態に到達したのけ一年の後であつたといふことで
 あります。其一年後に初めて四五人の親友を招待して心から
 喜びの茶事をせられたといふ話があります。
 されば、釜の良否は其の湯の味が茶にふさはしく出来上つ
 て居る釜を以て茶道第一の釜とするのであつて、如何なる器
 と雖、釜の中に数年或は数十年を置くれ、偶々取り出して二
 遍か三遍か湯を沸かした位で、どうしてそれだけで茶を煮て、飲
 むことが出来ませうか。現代の茶人と稱する人の多くは眞の
 湯の味を見る人が少なく、徒らに器を飲む茶人の多いことは

歎かはいしのこととあります。

私は度々有名なる人の茶事に招かれたことがあります。や
りこの弊は免れることが出来ない。恐らくこの弊を脱して
茶に適應した湯の味を賞美する茶人は甚稀であります。

亭に、も一つ大切な事を申述べませう。それは水といふ事で

あります。お東眞実に茶を愛する人は、支那は勿論日本に於

ても水といふ事に非常に注意を拂ひ来つたやうに思はれます。

それならば、何の水が茶に最良といふかといふ問題であります。

有名なる京都に於ても升戸の水といふものは甚茶にふさはしい

もののび少ない。唯洛陽七石水と稱するが如き水が古来茶に宜

しいといはれて居ります。例へば醒あ升の水、東山覺陀羅水、

大原のおぼろの水、等がありますが、最ふさはしいものは

清く流るゝ川の水であるやうであります。其れが古来宇治川

の橋の三の間の水を上より汲み上げて、茶を呉てる事を、信

長太閤以来の唯一の名水とした理由であります。

何處にしてもあまり水の濁つて居ない河流で、長い間操り此

て来て居る水が茶に適應すると思ふ。

京都では、下加茂の御手洗の水、大堰川で汲み上げた水、京

都西洞院及び堀川の兩岸から滾々と湧き出づる幾多の生洲と

いふ水があります。これは加茂川の水が地下を通つて到る所

に噴き出るのであります。この水も茶には非常に宜しい。

千家の裏表の住宅の前には、小川といふ川が流れて居ります。

その水上は加茂川有栖川の水を集めて流れて居るもので、こ
 の面家の升戸水も相当に良い水として、茶人に知られて居る
 やうであります。
 数々の宗家も西洞院にありすから、やはり良い水の持主で
 あるやうであります。
 要するに、茶は如何に上等の茶を使用するとしても、其茶を炙
 てる水が宜しくなつたならば、凡ての味を害ふものである
 から、昔から古人が非常にこの水に對する苦心をせられた話
 を聞いて居ります。
 織田信長が佐久間將監に注意する言葉の中に、水をわづく宇治
 橋の三の間に汲みにやるといふ事は、武士としては馬鹿な話
 であるといふやうなことが、信長記に出て居ります。
 これに、一面には信長が茶道にあまり明るくなつた事を示
 す事にもなりす。他面には、当時の英雄達が茶の水を得る
 事に如何に熱心であつたのを知るよすがでもあります。
 有樂齋の正傳院にも、下度齋の席の外部の中庭中央部に、石
 の側の升戸が掘つてありました。これの中々の良い水で、常
 に水屋に使用し、又臺所に使用して居りました。
 太閤が桃山城を築いた時にも、この水に苦心した結果、山里
 凡には宇治川の水を飲用することに成て居たやうです。
 私青年時代に京都で茶事をいたしました時なども、この水
 の爲に苦心して所々方々の水を飲みに行つたものです。音羽

の瀧の水 白川の水 又は清瀧の水など中々宜しい
ホストンの飲料水は實に宜しくない劣等品です 然し僅かに
三四哩の面コウラド河の水を漕して茶に用ふるならば之を
そ絶好の水で 濃茶 薄茶 玉露 又は番茶に至る迄可なり
ざるは無き良水であります
要するに 良水は他の礦物質又は不純の物質の含んで居らな
い水といふことになりす されば 良水を得らぬ場合は
近頃の蒸餾水でも不純の水よりは宜しいやうです
桑港も昔は水の悪い所でありました 十四五年前に例のヨ
セミテの水が来るやうになつて 近頃は實に良水になりま
した 茶にも十分適應するやうに思ひました オーストラランド
近辺も同様で、ミシシッパ河の水を引いた爲に、此も茶に非常
に結構でありす 羅府もこのコウラド河のパーカードムの
水を引くことになつて、變化した事でありませう。
さて話は釜にかへります 日本に茶道が傳はつてから 先
づ最初に湯を沸かす釜を作つたのは九州で 肥前の芦屋と称
する所である この芦屋の釜は古くは鎌倉の末足利の初頃
で、時代が潮りまして、多くは臺子に用ふる切掛の釜で、又は鐺
のある羽釜が多いやうであります この芦屋釜には大低外面
に画がありすから、画のある釜は芦屋といふことに古来言
ひ習はして居ります 其の中には、雪州が下画を書いたとい
ふ傳説などもあり、如何にも古芦屋のよいものになれば雪州

の下圖がとも思はれるやうな筆力雄健な画があります。
 其の次に古いものに、古天^{てん}猫といふものがあります。これも
 非常な古式の形を表してゐる釜でありまして、珍重せられます。
 少し若いものは、唯天^{てん}猫といひます。
 申忘れましむ、芦屋にも文字のあるものがあり、又あられ
 の模様の誠に鮮やかなものもあります。
 天^{てん}猫に次で、貴れるものに、淨^{じやう}淋^{りん}といふ名の釜があります。
 之も利久以前の釜で、模様は一向ありませんが、石疊地の古色
 を含んだよいものであります。
 之等の古い釜には、形が如何にも調ふたものが多く、それが
 今日に於て特別に賞^{しょう}観^{かん}せらるゝ所以であります。
 其れから、加賀には寒^{かん}雄^{ゆう}といふ釜師がありまして、数代続いた
 りてあります。初代が誠に上手で、余り厚手ではなく軽い釜
 を作りました。
 淨^{じやう}益^{えき}もよい釜師であり、淨^{じやう}雪^{せつ}も千家代々の釜師でありまして、
 色々形の異なつた釜を作り、京都の三條通りの金座に住居し
 て釜を作つた處は、金座といふ地名になつたので、大西淨^{じやう}雪^{せつ}
 の爲に出来た所の名であります。
 其他地方くにも名の知られざる鍋釜師が、田舎茶人の嗜好に應じ
 て作つた釜は、随分莫大な数と思はれますが、前記数名の釜師
 及び其子孫が、専^{せん}尊重せられて居るやうに思はれます。
 次に釜の形であります。大体夏には丈の高い釜を使用し、

冬には此は平たき釜を使用する定例になつて居ります。此は冬は炭火の力が弱い爲に平たい釜を掛けて、湯の沸くことを助け、夏は火力自然に熾んでありますから、火の力を借り、ことわざ少ない爲に、細長い釜を使用するので、然し又春夏秋冬共通に使える釜があります。それは平たい釜と細長い釜を折衷した形であります。

例せば、

冬は平釜、

銖銚平釜、

焼口の釜、

等

夏は、

雲龍、

四方釜、

肩衝、富士釜、等色、

四季共通の釜は、丸釜、あら此釜、御所凡、其他沢山あります。

尚申残したことは、沢山の文字の書いてある釜の事であり、す、最古く文字の書いてある釜としては、

徳が書かれてあるのであります。即ち孝養父母、五臓調和、睡

眠自在、等々であります。之が私の見た範圍のみならず、一

般に文字の書いてある釜として、尤古いものであるとの説であり、

ります。又釜に鑲鎖自在を用ゐて天井から吊る釜があります。此に二種類あつて、一つは手取釜といひ、一つは吊釜、又

は自在釜といひます。手取釜は普通の丸釜の如く、羽釜の鐺を缺いたやうなもので

それ此に一方に大きな口があります。それは鉄瓶の口のやうな

ので大抵は眞直のつです。昔の教奇者はこれで粥なども焚き、又湯を沸かして茶を呉れたものである。彼の有るな堺の茶

人である一路居士の歌に「手取釜已れは口が出過ぎたが雑水焚く」と人に語る「ふ」といふは之を以ても察することが出来るのであります。

自在釜とは、鎖の自在を以て吊りたる釜或は時代のついた美事を源竹で作られたる自在を以て吊りたる釜、之は室に普通の釜であつて口はなない、大抵は丸釜肩衝あられ等の種類であります。其外に、釜師興次郎といふも相当の作者でありまして、尻張丸釜肩衝、縁口阿弥陀堂等の良い作を残して居ります。又其他にも大徳寺の眞珠庵（一休和尚）聚光庵利久堂等の名のある釜が、あります。之等は別に作者の定まつたものでなく、それ、必要に應じて作つたものらしくあります。然し其の格好等時代に応じて趣のある所を賞翫せらるゝものであります。

風爐の事

前に申述べました通り、最初は釜と風爐とは一對に切掛け、あつたものであるが、後には風爐と釜とを別々にして、色々の風爐が作られました。例へて見れば、大口、小口等の鉄風爐、或は豆の格好に由て軸足、乳足の風爐、又は唐金の風爐、これには軸足も乳足もあり、金銀象眼の入つてゐるものもあり、又松竹等の景物の透かしになつて居るものもあります。又陶器の風爐即ち織部信樂、備前、瀬戸等の風爐もあります。

又、木の風爐もあります。これは白木の四方風爐で、中は漆喰を塗り、火を拒くやうになつて居る。夏特に酷暑にはふさはしいものとして、よく使はれて居ります。利休の好みであつたかと思ひます。が記憶の體でありません。木材は桐もあり、厚朴もあり、桑もあり、大体は白木の本地であります。又、この外に斜久保みと称するものに、土風爐といふものがある。これは深草の土焼きで、外部は非常に美事を黒色の磨きのついたもので、大低は大口の風爐であります。そして面とりであるやうである。面とりとは上の角が削られて居るものを面とりといふのである。この美しい漆黒の磨きのある深草の土風爐に、天猫、萍游、等の金さけ、臺子又は長板等の手前をいたすことも、洵に奥床といふものであります。之に次で話しておきたい事は五徳であります。大低五徳は二つの形よりないやうに思はれる。五徳の爪先の鋭きものと、其角の鋭くないものとがあります。何れも金師の作るものであります。割合に古いものは無いやうである。それは度々火に置き、又灰の中にて日を送るために腐蝕作用を起すからであります。

爐の種類には、左官の塗りたる爐と、瓦の爐、箱の爐、丸爐等の種類があります。何れも釜を掛けるに十分のやとりのあるべき爐を用ふるものである。

次は炭斗である。炭籠と炭斗箱との二つがあります。

菜籠は初支那より傳來したもののうしく、色々の意匠を以て編
んだ竹或は藤の籠で、その中に道具炭を飾り、火箸、香合、
鑲、金敷、羽箒を入れ、炭の手前を飾るものである。
炭斗箱は利久好みともて、民間使用のものと同じ格好の炭斗
箱である。然しながら其の材料は美事なる桑材を以て作られ
てあります。

続いて、顔の炭斗といふものが利久時代からあります。これ
は、顔の下部を真直に平たく切り、内面に黒漆を引き、外部に詩
又は歌を書てあるもので、これの中々妙味のあるものであります。
鑲、金敷、大方藤を以て編み上げたもので、上等の品は、元
明の舶来品らしくあります。

鑲は、金の鑲で、金の上げ下しをする爲の鑲であります。之は
別に明珍などの鉄細工家の作であります。非常に鍛への宜し
るを尊びます。其の理由は、鑲のかけ外れ或は重ぬおく時分
に妙音を発するを喜ぶものであるからであります。然し時に
は、金師自ら作ることもあります。

火箸も、略同断のもの、鉄の火箸は明珍等の作を喜び冬の
火箸には、淨味、淨益等の作を喜びます。

羽箒は、炭手前の後に爐又は風爐の周囲の塵を掃きよする爲
に用ふるもので、これには種々の鳥の羽を用ゐますが、就中
昔から使ひ習はされてあるものは、鷹、鷲、鶴、雁等の羽で作
り、右羽と左羽との二種類あります。右羽とは羽の右の廣いも

ので風爐の手前に用ひ、左羽は羽の左の廣いもので爐の手前に用ふることになつて居る。
次は香合であります。

香合の事

茶事は大別して、炭手前、懷石、濃茶、薄茶といたします。炭手前は濃茶の中に入れることにすれば三つになります。即ち炭、懷石、濃茶であります。この三つの中に各々堂要視せらるゝ道具があります。炭手前では即ち香合であります。炭の手前を凡てなし終る時に最後の一兵を打つものは唯一片の香であります。其の香を入れてある香合が如何にこの初入りの席上、堂要の役目を成すかといふことは直におわかりになる筈であります。

室内寂として音なく、爐或は風爐の美しく化粧せられたる灰の中に、秩序整然として、胴、輪、丸、ギツケヨ、枝炭が各其の場所を定め、然も火の起る途を遠ることなく、おのづからなる自然の儀を運びたる炭のお手前を終り最後に一片の名香をのつて、謂香合の中より取りて、熱灰の上に投じます。此は稍暫時あつて復郁たる香氣が室内に満ち、爐の周りに端座し或は風爐近く座を占めて、其の味を心頭に聞く時の妙境は、無限の中に清寂其者となるのであります。これに於て第一位に讚美する所以では

ないかと思はれます。されば古来の茶道を述る者がこの香合を得んために、あやうる苦心をせられた具形跡は実に驚くべきもののあります。

大体に私の知つて居ります範圍に於て其るを記して見ませう。交趾香合、これは其の意匠或は画又は圖案に由つて、色々の名

があり、其の中尤有名なものは、交趾臥牛香合、大電香合、狸香合、菊牛香合等であります。

唐物染付香合、辻堂香合、桃香合、青磁香合、赤絵小丸香合等

和物では、伊賀伽藍香合、黄瀬戸香合、古田織部作香合、瑞五郎大天作香合、特にこの人の香合には瓢箪の形をして中

はり上下に二つに割れ、藍絵にて飛んでゆく小さき鳥を人物が

摺り竿を持ちて指す画が書いてあり、大小色々あります。が、最小なるを貴ぶ、之を祥瑞鳥とし瓢箪といひます。尤祥瑞も

其の外に色々の香合を作つて居ります。が、この人のものは全部藍絵のみの許りである事は申す迄ありません。

志野の草香合、古薩摩香合、古きものは彩色少なく美事なる毫裂が入つて居

ります。後のものは色々の彩色又は金を鏤め、洵に美しいもので

信樂香合もあり、又代々の樂も色々工夫をして良い香合を焼

いて居ります。仁清、乾山、も中々意匠のある香合を製作して

清水焼では、

仁清

乾山

も中々意匠のある香合を製作して

居ります。其他、全國の窯で焼いたる器も、牧舉に選りありません。要するに、形の異りたる、意匠の美事なる、袖のりの変りたるを喜ぶものであります。

初代高麗左衛門の款焼、松本款、雲州不二名焼等、中々面白

い香合を焼いて居ります。高取、又は上野焼等には、余り香合を多く見ません。然し相馬

の百いものには有るやうに思ふ。これには練香を使ひ、即ち冬の香

合といたして居ります。昔は、以上述べ来たやうに香合が使用せられたり、せられたり

かつたのは問題でありませう。元龜、天正以來、爐と風爐との

差別が、まず初め、後は、専ら、焼物の香合は、爐の炭手前に使ふ

事になつて居ります。其處で、又一段と別種の香合のお話をいたします。これは

香合といふよりも、むしろ香入れといひ、或は香函といふ方が

適當かも知れない。この香函は、中に練香を入れます。必ず割

香を入れる。例へば、伽羅、沉香、白檀、真名盤、及び種々

の乾燥したる調合香等。

(三條西家に傳はつたる種々の調合香であります)

この香を入れた、即ち風爐の炭手前を使用するのであります。

古来、それの作者に種々の名器がありませうが、幸うじて私の

記憶に存するものの中述べて見せう。

26

ぐりの香合、推朱香合、存星香合、香具香合、楊成楊成作
推朱香合、この面人は推朱、ぐりの香合である。郭子儀香合
又、代々の宗匠及び有る茶人の考案になりし、種々の好みの
香合がありまうが、到底一々挙げて書くことも出来ません。
前述のやうなものは、現代に於ては實に高價なもので、容易に
手に入らないものですが、かゝる高價なものを使用せずとも
如何なるものでも、茶味に叶ひ、色合ひ、意匠等、その趣を成
して居れば、必ずしも古いもの、名のあるものである。これは呉北、
窯のものでも十分に用をなすに足るものである。これは呉北、
も茶に心を致すものに缺くべからざる所要な條件である。

性格の善悪

安井騎兵

我々は日常あつ男は善いんだと、或はあんな女は悪いとか
いふのを聞くが、善悪の根本は行為の表面でなく、その人の
動機、如何によつて極まるものであつて、本當に人の善悪を
判断することは決して簡單ではない、従つて一寸とした外見
位で彼れを是れ云ふことは危険千萬である、多くの場合、あの人
が善いとか、悪いとかいふ事は、寧ろあの人が好きだとか、嫌
ひだとかいふこと、同意義と解して差支へない。

道德の起原を心理的に見ると元々不義や不道德をした人々がお互に他人の不義や不徳を抑へる爲に設けた規定であつて、その根本には自分も兎も角他人の不義不正を制する事が内面的の目的である。しつしてこの心理状態が今日に於ても多少我々の心を支配して居るのである。従つて道德を矢金しく云ふ人の中には、屢々自分自身に不道德の傾向を多分に持つて居る人である。屢々自分自身に不道德を守らざることによつて利益を受ける人々である場合が尠くない。教師や父母や宗教家の多くは、意識的にそんな卑怯な動機を持つて道德を説くのであつて、意識的であるところと拘はらず、教室に於て靜肅を説く場合、親が子供に孝道を説く場合、又宗教家の犠牲や献身を説く場合、その結果利益を受ける教師や父母であり、父母であり、僧侶であるから余程願望に考へた上で説かないと、折角の説教も聞かぬ者の反感を買ひ、逆効果を齎すことがある。吾生の知人に禁煙禁酒に熱心な人がある。彼は人の顔々へ見れば煙草酒の害を説くのが癖である。彼の前半生を見ると酒色の爲に身をもち崩し、その結果病氣を得、遂に医師から禁酒禁煙を勧告された。その後彼の禁煙酒を説くのは他人に聞かせる爲であると同時に、自分の心の内にある酒や煙草に對する誘惑を抑へる手段でもある。あの人にはケンボだとか、ズ

ルイと人の缺欠を捜うなくては居れない者がある。人を批判し、非難する心理と、また道徳を説く心理とはその根本に於て共通な点がある。唯前者の相違が、即ち前者が消極的であるのに対して後者が積極的である点である。

自分の心に不正があり、缺欠がある場合に、同じ不正、欠欠を他人に見出すと、癪に障つて非難したくなるのである。斯く見れば、觀る人の癪、口をいふ人は、自己の内にもそれと同じ缺欠を持つて居る証拠であつて、人をケチなると非難する人は、いはれた人がケチの癪をいふ別問題として、黙くともいふ人がケチであることは大体に於て間違ひないやうである。又癪口をいへば非難されて、ひとく辯解する人や怒る人も全然潔白だといへば非難されない。吾々は腫れ物に觸られた時と同様に自分の欠欠のブボシを謂はれる程癪に障ることにはない。故にもし吾人が人にいへばれたことが癪に障るやうであつたら、還つて静かに自省する。

眞に修養し、自己を判断し、他人の善惡を公正に評價しようとするならば、先づ自身を人の立場に置いて、人を攻撃する前に、若し自分が彼の境遇に置かれたらどうするだらうかと考へて見るがよい。親の子の親の立場に立ち、教師が生徒の上司が部下の部下が上司の立場になつて、夫々考へて見て、始めて公平な判断が出来る。これが眞の意味の道徳家である。天路歷程の著者ジヨン・バンヤンは自分の近所にある監獄に

出入する囚人を見る毎に、自分を囚人の境遇に置いて反省し、
胸を打つて、あすこにバンヤンが歩いてゐるといつて自責し、
且囚人達に同情したといふことであるが、斯る人こそ眞實の
人と謂ふべきである。

性格の善悪を決定する標準は何か、それはその人の行爲
が、自他の社会生活にどういふ影響を與へるかといふことによ
つて極まる。生活の目的は生活を豊富にするか否かあり、生
活を豊富にするには、独善主義を排して社会生活を営むこと
である。自他の社会生活を豊富にすることは、どんな事でも
善事であり、これに反して社会の安寧を亂し、他人を傷ける
やうな事は、何事によらず悪事である。

由來道德といふ善悪といふものは、他人があり、社会が
あつて初めて起つたものであつて、社会を對象とし、善い抽象
的善事も、悪事もあり得ない。然して、理想的正義とは、他人の
利益と、自分の利益とが相半した場合をいふのであつて、独善
主義に眞理がないと同しく、敵を愛せよといつたやうな自己
を全く没して、人の利益のみを理想とする道德は實際行はれる
ものでない。之に反して、人を愛するものは、自分が愛される
爲であり、人に親切をするのは、人から親切にされる爲である
と分れば、愛も同情も親切も自然に実行が出来るのである。
善い性格を持つて居る人は、大体に於て成功し、又多少の
例外はあるが、悪い性格の人は最後に失敗するものである。

然し善いとか悪いとかいつても相對的のことであつて世の中
 に絶対的の善人もなければ、又絶対的の悪人も居る訳でもない、
 自我像彫塑の藝術に於ては人間に善いとか悪いとかレフテル
 を貼付けることより、先づ各人が自己の社会生活を樂しんで
 居るか否かといふことが根本問題である、
 若し吾々の日常生活が面白くないやうであつたら、それれ自
 分の性格に悪いところがある証拠だと見て大過はない、
 更に詳しくいへば、自己の生活目標の實現の手段が非社会的
 であるために社会生活が面白くないのである、かく考へて来
 れば、善といひ、惡といひ、所謂道德は個人本位でなくて、
 この道も社会本位でなくてはならない、
 善い性格の内容は、一にも二にも社会的であることが大切
 である、即ち勇氣を持ち、常識を持つて、社会的有意義の仕事
 をすること、が善である、
 社会は繁栄する、古来、智仁勇を道德の根本だと考へたこと
 は誠に理由のある事である、
 然し此の中で最も大切なことに勇氣である、而してこの勇氣
 とは、一善をなすに憚る勿れ」的の勇氣である、然して今日の
 智識階級や指導者に缺けた呉れこの種の勇氣である、世の中
 には勇氣のない善人が沢山居る、
 道德は床に飾つて眺めて居るやうな靜的なものではない、
 飽くまで勇氣を持ち、自信をもつて積極的に進む處に道德性
 があつてゐる。

初春の訪北

増本美篠

不順であつた天候も何うやら本格的な春らしい暖かみに變つて来た様である。升中の蛙も亦候貴重なる認面に生駒をさらしに啼き出て見様のなごいノソリと這ひ出て来たのだから頭がうべやヤンコに踏み潰さないで頂きたい。想ひ出す土中生活で種々頭に浮んで来た事の数々を取り留めもなく啼いて見る事も暖い春の一興のとも思ふ。お互ひに入所した当時と現今の心境とは大なる變化があつた事は否めない。転住所生活が長くなればなる程我儘も言ひたくなるし愚痴つても見度くなるのが人間の通性であるが致し方がない。とは言ふものの、お互ひ様の本性が日に露骨に現れて来る。善人の縁な人が業外染まるとは爪弾きせられ居たりあつたり。善人の見悪人の風態の人が仲々の善人であつたり人は見かけに依らぬものと言ふ事が判然として来て来氣にとり人々も教多ある事ならん。業外な人達だと言ふ風を考へ方で他人様の弱兵や缺欠のみを責めて吾賢しとする人も強者弱肉の部に属する。已も俱に人を責めて置きながら、イザとなると彼に味方すると言ふ様な御仁も相当あるらしい。余り鳴くと升中の蛙の癖にと言はれるのも感心出来んから。之から少し方面を換えて駄文つて見様と思ふ。読者の諸賢乞ふ諒とせられよ。

大分以前の事であるが、私の郷里の近村に政と呼ぶ物貰ひが
 居た。物貰ひと言つても世にありふれた物乞ひとは全然趣
 を異にして居た。こゝの彼は相当地格のよい男であつた
 かう物を貰へば必ず口には出さず、庭の掃除の何をしてその
 恩義に報ひると言ふ様な人で、人かう可愛がられてゐた。併し
 日傭人として居るは不向きで、大分脳味噌の軽い男で定つた仕事は
 したくないと言つた人間で、何時でもへうく笑つて子供が何ん
 な事を言はふとも決して立腹した事はなかつた。悪戯盛りの
 子僧達から政さんには良い嫁さんか居るうしい。何日結婚す
 るのかと尋ねられ、とて笑つて答へ、嫁ともしない。余り執
 拗に問ふと恥づかしいと言つて顔を眞赤にして逃げ出すと言つ
 た具合で、五十近い鬚男の初心な恰好を眺めて、噓聲を上げて喜
 んだものである。併し彼も矢張り男であつた。同じ地方に矢
 張り腦の目方の足らぬ美代といふ女性と何時しも戀を語らふ
 身となつてゐた。而して何日とはなしに同居して夫婦が此の
 の仕事を肩付けて、口々に馴して居たが、月日の経つに併れて、私
 の地方へは余り来ない様になつて、世人から却つて心配して貰
 つて居た。遠ざかるもの日に疎し、段々世人から忘れられて
 来た。人の噂で、赤坊まで出来て、其の後には幸福な生活を営ん
 で居ると言ふ事であつた。兩人の合せて、認めてあるまいが、
 結婚後は大分腦の異状も軽減して、二人が必ず一緒に少しの仕
 事でもしても平和な日々を過して居ると言ふ事であつた。何日

の間にか何処とも知れず旅立つて了つて居たと聞いて皆不憫
に思つた事であつた。私の今言はんとする事は彼の世人に一
寸眞似られぬ美臭のあつた事である。其れは彼政に物を興へ
る時特に食物を興へる際其れが如何に不味い物であらうとも
又如何なる物であらうとも受取ると同時に此れに向つて合掌
する。少時して食器に合掌し、後東西南北と順次合掌して家人
一人々に旦那様頂きます、奥様坊ちゃん、嬢ちゃん、と一々丁寧
にお辞儀して後初めて箸を取ると言ふ男であつた。その間常に
彼の態度は眞面目そのものであつた。彼の能力には缺陷あり
と雖も、その行たるや到底常人の及ぶべくもない立派な日常で
あつた事に想到し而して吾人の今日の常に口にする不平不満
特に食事に対して美味いと不味いとが不服ばかり述べて食
事を摂る時に果して幾人の方が食器に感謝し合掌し宇宙に感
謝し興へて呉れた食物の主の御礼の氣持を抱きつゝ、合掌する
人が百%の滋味噌の所有者の中の全体から言つて幾割あるで
あらうか。完全なる能力の所有者が不具者におつた行ひをし
て居る事に想到する時、私はせめて吾等の後継者である二世
子女にても感恩報謝の生活に生きて呉れるべく指導して行き
度いものだと思ふ。

青葉若葉の春の訪れに徒らに月日を過すことなくお互ひに政
に於らぬ生活を致すべく努力致したいものである。

子女教育の爲外部移住の友を送る

小樂

一 あゝ我が友は行きますか
二 とせ過ぎし交わりを
三 暑さ寒さもいとはれて
まゝさういませ我が友よ

名残もつぎこの別れ
いかなる時も忘るまじ
家庭のために世のために
さうばよさうば我が友よ

『文藝は人間生活を深める』

鬼谷子

詩を持ため生活の空虚さを思ふ。詩は生活の幻影である。
幻影は現実以上の現実である。
生活は詩でなければならぬ。詩はすべての生活を、すべての
現象を根本的に見、根本的に考へる。
詩は生活の精進である。醇化である。更生である。革命であ
る。詩は、ただ一筋の道をまっしぐらに走る。
詩はいつも最も平易、簡明でなければならぬ。善悪に於いて、
最も偽らぬ判断をなし得るは詩の心である。詩の心のみで、
星の世界をも私たちの小さな心につゝむことが出来る。
宗教は詩でなければならぬ。眞実な宗教家は必ず詩人でなけ
ればならぬ。詩を持ため宗教は邪教である。詩人でない宗教
家は俗人である。宗教にしろ、哲学にしろ、文藝にしろ、み
んな人間の生活をさうに深くし、生活意識をさうにはつきり
させる爲のものである。皆だ。

文藝研究といひ、哲學的思索といひ、畢竟するに私達の靜觀を育てる爲である。正しく人生を見、正しく人間の心を察せんが爲である。私達の生活に於て一番不愉快な事は、人間の心の正しい価値踏みを知らぬ人の少ないこと、文藝にせよ、哲學にせよ、宗教にせよ、私は所謂玄人なるもの、見方を嫌ふ。文藝が、私達の生活を深くするもの、実は人間の性情の一番弱い處に於てである。近代の文藝は最も卑しい人間の心の底に一番尊い人間性の閃きを見出した。文藝の教ゆる所は善惡以上の世界である。私達の現在の生活は余りに窮屈である。余りに窒息しうてある。さうと寛かな生活があるべき筈だ。善惡の安價な目やすを籍りて人間生活を計らんとする人達が多いいらうだ。人間生活はもつと自由であるべき筈だ。空には、太陽には、自然には、微風には善惡の觀念はない。人間生活は、太陽の如く、太陽の如くあるべき筈だ。今日の社会問題の多くは、小智によつて肯定せられるところの法律常識に依つて解決せられやうとして居る。茲に窒息しうた社会生活の悪氣流が漂ふて来る。文藝哲學宗教、是等のもの、志す所は、大智の世界でなければならぬ。文藝といひ、哲學といひ、所詮正直な言葉にすぎない。正直な心から生まれて来る正直な言葉それの文藝であり哲學である。

人間生活を深め、人間生活の意義を実感する爲には、私達は
正直な心で生活を見なければならぬ。行爲しなければならぬ。
人生を正しく見る眼、正しく感ずる心にも時として曇りが
かかる癖がつく易い。立派な文藝や哲学は、その歪んだ視線を
矯め直して呉れる筈だ。曇りを磨き直して呉れる筈だ。
人間の心を観るにつけても、もつと苦しい精進が必要である。
雑念を排してただ一點に於て、人生の深い所を把握する爲に
は、念々刻々の精進が大切である。これらの精進は、文藝或は
哲学の中に求められなければならない。
文学は一つの修行である。悟道である。眞の文学者が生まれ
出すことは依りて、大丈夫の一生を托するに足るところの
立派な事業となりて現はるものである。

晝休み

松村こめ子

晝休みの一時間、ヒルデングのバルコニーに飛ぶあひるの職業
婦人、オヤツと笑ふ聲が、あちからこちから聞える。
何がそんなに嬉しんだらう。
「あら、いやだね、そんなこと」若い聲がはしやう。
「私とても、難問題にぶつかつて」
此方では、ヒソヒソと昨日の晝休みからの内緒話し。

でその問題つて、私に打ちあけられぬ。
職業婦人の聲は鎮まりぬ。

創作 晩春の夜べ（前号の続き）

百合子

何處のらび、壁し迫つて来る様な晩春の濃情を空氣の漂ふ今
日此頃庭の草花に存すべての植物に芽ぐみ奮つたが漲つて来
て居る。こうして四圍の濃厚なものと、かけ離れて寂寥の心を
抱きつゝ、日を過して居る美代は、思へば夫がイムス、アーミーに
出てからもう一年になる。子供の育つのは早いものだ。愛児
がエミは此の秋にはブレンマー、スモールに通ふやうになる。
いつか夫が無事に帰省して、マエミの大きくなつて可愛やい
姿を見たなら、どんなに喜んでくれるであらうと思ひつゝ、お
かっぱの頭を撫で、愛しものである。
朝のう晩まで可愛い聲で歌を唄ひ下り遊んで居る孫娘を祖母
は茶吞み友達のおばさん達に、「マエミは家の太陽です」と目
を細くして語るのである。それに、姉は美代を実の娘の様にし
てくれる事を思へば、美代はすべてのものに手を合したいや
うな感謝の心が湧くのである。
其の日も老いた両親を援けて終日働いて来た、夕食の後片手
けを済ましてから只一人庭の芝生の上に腰を下して一息した、
慇ましい様な晩春の夜の風は、今を盛りと咲き乱れて居る薔

薇の香りをめたりに漂して居る。最ふそよ、夏の音づれを知
らして居るやうに。

真夏の様に明るい十五夜の月を仰ぎ見下ら軌線にある夫の身
の上を柔まつ、心いつぱい祈るのである。

自然の美を愛したゲイムスは、能く春のら夏にひけて美代をつれ
て人里離れた山にドライブした。二人で新鮮な空氣の山路を
交替にドライブした。めも嬉しい事であつた。

又夏の暑い日には、 $\times \times$ 川によく二人で泳ぎに出掛けた。忘
れもせぬ彼の $\times \times$ 川で初めて泳いだ時の事を、そり立つ様
な険しい山と山との間を真白い飛沫を立て下ら流れ来る川
の水も彼の泳ぎ場所となつて居る。あたりは川幅も廣くなり
水底は深いのであらう。濃い色を湛へて居る。片方は水が大
きく渦巻いて。

先着の幾人もが最ふ水に入つて居た。真夏でも雪解け水が流
れて来ると聞いて居る。川水の冷さに美代はフルッとおふる。す
る様に感じながら思はず水面に立ち上つて、周囲を見え居る間
にゲイムスは早稲手を切つて向ふ岸に泳いで行つて、石山の辺に
腰を下し泳いで来いと合圖して居る。

深くて恐しいわ、それに流れが劇しくて身体が流れそうよ。

溺れたら助けやわ、それから心配ない泳いで来なさい。と丸で命
令する様なゲイムスの聲に、何事にも夫を信頼してやまぬ彼
女は向岸に向つて泳ぎ出した。岸辺に着けばゲイムスのさし

のべた手に縋り足元の悪い石山に立つて美代は夫の顔を見下
ら嬉しうにニツツりした、強烈な太陽の光線で焼けてる石
の上は水やう出た許りの冷たい身体には心地よく暖い。

「よーい日光浴になるよ、よく身体を焼きなさい」

水に入つたり出たり水鳥の様にして過した日が懐しい。

「今晚は、軽い靴音と共に明るい聲が間近く聞えて、美代は顔

を上げるなり「あら、うちつしやい」フツレンスだ、同じ様な

境過にある二人は今は心安い友達になつてお互ひに慰め合つ

て居る。

「まあ、何を考へてゐたの、お月さまに照された貴方は随分寂

しう、何よ、自動車が家の前で止まつた、お月さまは聞えなかつたで

せう、何し知らなかつたわ、

「皆さんお留守やうですわ、

お母さん達マユミを連れて先程メ々さんのお宅へ御出になり

ましたのよ、お家へ入りませう」

「外の方がよいわ、こゝで話しませう」と言ひながらフツレンス

はよくのびた両足を横坐りにした、子供のない身軽な彼女は

市のメ々オヒースで働いて居る、綺麗な美代に比べて豊饒な

夏の花を思はせる様なフツレンスは性格の上にも大分異つて居

る、いつも沈み勝ちの美代を明るく心を引き立たしてくれる

のだ、そのフツレンスが

「美代さん、最近い中にメ々市に立たうと思つてますのよ、

「あらどうして、親しくして頂いて下さるかに、
御存じの様に、あちらに従妹夫婦が居りますの、その従妹の夫
に、入営の通知が来たので、すつて、夫がアミーに行けば幼ない
三人の子供許りでは寂しいから是非来て同居してくれないうか
との手紙が来ましたのよ、要行つた方が従妹の爲にもよい様
に思はれてね、
そんな事情でしたらやむを得ないわね、ではいらつしやいよ」
美代は親しい友に別れる言ひ様のない氣持を如何する事も出
来ぬ様に戦いの世を静かに考へて見た。平和の鐘の鳴るのが
待ち遠しいわね」と二人は涙みじみと語つた、（完）

モ
俳句

四季雜詠

和氣湖月編



五十住靜遊
若草や塙境に佇てる栗鼠親子
ポストンや塙田に参り青みたる

レフドの笑ひの珈琲に笑ひ初め

窓に闌けて並べる葱坊主
葱坊主敷へるが如蝶飛べり
配所にて素聚なる身の日向はこ
註、素聚とは縁を得て管て無職
けるを言ふとぞ

篠田香虎

巖山の頂はのと春の雪
スライクや今が剪り頂眺めころ
春曉のノス煙突は賑へる
灯せる狭庭に白ふ香雪蘭
馬迹にキマニア然出や東風の朝
川波の岸を洗へる柳かな

神瀬赤城

大群の雁南へ小猿雪
喜びて奇遇に泣ける木の葉髪
度ましく編める嬌の輝手
み民われ氷柱の金細くいりけり
ホストこの春反さ来て冬籠
監視塔に哨兵佇てり月凍る

関五松

獄立て、見渡す加州春の雲
注がれしは慰問の味噌や根深汁
春曉の丘に聖歌や大燦
曉にふらりと戻る浮かれ猫
糞晦にひきすう返る彌生土手
烟徑を銜煙草や日脚延ぶ

小田華泉

緩かに麓の風車草青む
下萌の道一筋のモスコト林
一畝の花太根の隣越し
子供等のマブル遊びや日脚伸ふ
喉や道を隔て、高き森
蝶々や彌々に揃ひし恵坊主

小島静吾

停電に早寝の宵や虎落笛
まつはれる砂壺の中の耕牛哉
菜の花を挿して明るき文机
春暑しまくしあげたる苗蔽ひ
春宵も供養につとふ無縁佛
外孫も連れて詣する彼岸かな

吉里竜耳

メスの鐘待ちて路もや春の庭
拓かれしそへば曠野や麥青む
芹の芽は底に沈みて雪解水
オヤンが然出の馬逐ひ

オヤンが然出の馬逐ひ

野馬逐へば餅返しや木の芽山
下萌の土ふぐくと馬蹄跡
丘に佇つ野馬に春日落ちんとす

安川不似郎

蝶白く貼りつる乾く潦
日曜の娘に反逆や暖かいし
語らへば旧知の友よ春の風

田中白水

春光や菟嶺と歩む飯休兵
集まれる娘等の合奏春うら
蹴鞠と野の測量旗春の風
菜の花と不断草生けて庵の春
アリスマの花こんもりと生庭
収容所にたりし眼鏡や春暮る

山根愚公

春水に大廻りするメスの道
前山をさのさすにして春の水
春曉の斬端や既に嘸れる
春曉の薄闇に峙つ水タコク
つうら下の河のあしたの棚霞

渡り鳥

奇しくも沙漠の山に春の雪
はるかに野馬逐ふ聲や水の音晴れ
咲き盛るビィ摘む少女餘念なし
若妻の誉めて遠ざけりケネーリッ
人群る、春猶浅きブルフ場

一輪の芥子さしてあり藥燻

山北涼水

吾池に隣の庭の青々どり
出て行く友を送るや卯月晴れ
移り来ては又再の花菖蒲
喜多流を唸る隣や春の宵
濯ぎ場に燉出でしと女達
脱ぎ置きしマキノは蜥蜴二三匹

喜壽

夕日残る山の彼方に臘月

和氣潮月

いたづらの跡蹤は行けば蜥蜴の水
應召妻にバラウの春は行く
焚火して燉燉る氣配更になし
モハへ野や花冷えもなく春行々ぬ
花ビィにスミツクの香や庭邊日
スタツクの香遠く流れし春の闇
菜の花や春経ち急ぐ収容所



課題 啓蟄(地虫出す) 臘月(臘夜)

五十住靜遊選

和氣湖月

安川不似郎

啓蟄の暮端然と日に背き

啓蟄や第目鮮き雨後の庭

臘夜やあてなきすの歩を運ぶ

臘夜やすれ逢ふ濃き脂粉の香

篠田香虎

啓蟄や庭に生へ出しこぼれ種

水桶の高き櫓や臘月

臘夜や映画歸りの人通り

仰ぎ見る飛機の灯の臘なる

吉里竜耳

裏跳ねて描く波紋や池臘

語りつゝ人の往來や臘月

啓蟄の土新らしき雨後の庭

地を出でし蝸這ひ居る軒端哉

小田華泉

月臘ラデオの塔を見上げけり

訪れて庭に語るや臘月

菜園を荒す野馬や臘月

啓蟄の穴新らしくこゝかしこ

啓蟄の穴掘り遊ぶ小供のな

小島靜居

飛びくにキヤンブの灯臘かな

臘夜や丸太ベンチに語りつぐ

穴を出し其日の熾の土運ぶ

啓蟄や園のカンナ角ぐめり

山根愚公

るも知らぬ地虫這ひ出す朽葉哉

臘夜や花菜畑の野馬追ふ

臘夜やそらろ歩きのしけしの間

液り液鳥

高々と水槽の灯の臘かな

集まりて輪になる子等の地虫出づ

穴を出し地虫に戯を小犬かな

関五松

爆音の過ぎたる空に臘月

停電のキヤンブ静かな臘月

切株に穴出し蜥蜴もの見顔

山北凉水

壽壽

飛機の音に空を仰けは朧月
蛇穴を出で、日南をのろくと
地を出でし墓のそくと芝生かな

神塚隠居

野外劇はわて帰るや朧月
朧夜や腰こいめ見る鶏舎守り

朧月雲と覺しく隠れけり
五十住静遊
啓蟄の盛りし粉土の乾き居り
大小の穴それくや地虫出づ
岩山に月代のして軒朧
カヨテ啼くセイジが原の朧かな

次回課題

暮れの春(行く春夏隣) 薫風

小田華泉選

毛
ハ
川
柳

山本延蔦

メスの鐘聞き分けて居る朝寝坊
チンドン屋女房はへうて笛をふり
釣り上げた場所へだん／＼竿のより
鑑札の有無に氣にとめず
ほんとうに釣れたのかとさく皆の聲
女房が要らない替ようまく縫ひ



ぼたもちを呉れる隣の女房賞め
よろしくと言ふ声のする愛宕山
梅見たる心は揺む雨の日に
華奢な手袋携げて乗馬服
初恋へ愛着心の絶ち切れず
素人の芝居の悲劇笑はせる
長谷川蒼逸

メス行々も好々を傘へと雨を避け
忍ぶ氣も猫の戀ほど知れりたり

山北涼水

盛花展誰彼れなしに一等賞
拭き掃除する度女房欲しくなり
盛花は捻し曲けられて美しき
言ひたさを胸に秘めて平和論
収容所は何をされても長閑なる
咲く儘に吹かして置けぬ盛花展

喜壽

事毎に夕ヨクするは身の破滅

小根愚公

この頃の世相をよそに独身もの
独身もの立小便の間に音
結婚が減つて教会ひまっつ
春水を隔てゝ語る隣同志
父と子の意見対立母困り
居眠りをして女房は夜なべをし
手がかれてゐる程盛花生きて見え

第二館府司会

課題 戀猫 水溫む

45

牛伏せる牧の流氷や水溫む

靜居

戀猫の声も聞えずなりけり

全

うのれ猫鳴きつゝ闇に紛れ失す

不似郎

水溫む池に投餌や鯉躍る

全

水面にのびし藻草や水溫む

佐藤

戀猫に醒めて堅きベッドのな

全

戀猫や啼き靜まりて闇に消ゆ

華泉

流し場に氷研が浸す水溫む

全

洗ぎする與の水の水溫みけり

渡鳥

夜遊びの猫寝まり居る日向様

全

戀猫の異様な声に目醒めけり

靜遊

少しづつ釣れるボウチや水溫む

全

追はれ来て垣に身を寄る浮れ猫

香虎

六州に跨る大河水溫む

全

降りつゞく雨の宵なる猫の戀

隱居

アリゾナのセージ野原や猫の戀

藤田

水溫む小みその芹の二葉せる

古春

巖山に入る弦月や猫の戀

湖月

枯れ散ける蒲の澎水や水溫む

全

得矣 靜居二十一 不似郎十三

以下略 佐藤十二 華泉渡鳥十一

次回四月拾日午後六時
課題 風 木の芽

ポストン文藝三月号抜萃

五十位静遊

おぼしまに人佇めり瀧を見る

佇めば虹鯉のに瀧しづき

瀧壺に上り来る鯉下る鯉

瀧池に心遊ばせ度々めぐり

吉里竜耳

遠山に目を遊ばせて日向ぼこ

凍て土に湯染の水捨てにけり

白楊の新芽や古葉つけしまゝ

関五松

轟々とボブら並木の春浅し

連水合ふ籠球廻と這入りけり

穂坂操様より初めてのお便り

考へてもいふ本当に懐しいあのポストンの第三キヤンプをあと
にいたします時程 お別れの身に沁みて感ぜられた事はござ



蔓伸びし種大根や忘れ霜

たよ女

餅搗や調子も合ふて歌たのし

冬ざれの柳はろ散りにけり

木枯や人影一つ星明り

小島静居

春雨にけぶるキヤンプの灯り初む

春の波たみのけれる運河哉

安川不似郎

物の苗竝べる二月ラスハウス

和氣湖月

芽柳につらう磧水積たる

山に雪見えぬ種蒔淋しけれ

莖立や葱の妻も今朝は良く

つぐ炭に火種は空し春火鉢

いまでもしてした。
私共は時間の都合が大変よろしくライニックスでは一時間許り待
ちました大で午後八時頃乗車した。三月三日の金曜日の
早朝停車場につく。それより又出迎ひのバスにて相当長い道
を辿り、やつと午前十一時にキヤンブに到着いたしました。主
人等の一行は、もはや前日に参つて居りまして私達を迎へて
呉れました。二年ぶりに遇ひました親と子の感激の様子には
誰れも彼れも泣いたり喜んだりいたしました。それから食堂
で山海の珍味の御馳走を頂きました。翌土曜日はキユーポンを
配布せられて、キヤンテンから自分くの好きなものを買つて参
りました。

ケツチン用の諸道具は申す迄もなく、三つのパーティーのある石油ス
トリープがあり、寢具、枕、マット等一切不自由なく揃つて居
りましたので、自分の手荷物はスリーッケー入迄まだ到着いたし
ませんでした。北ども困らないやうになつて居ります。
二とせの暗い留守居の生活の中にも、モハベの歌を沙漠のオ
アシスとも思ひなつかしみ皆様の御厚情の下に楽しく過させ
て頂きました事は、何處の果に居りまして感謝の心で一杯
でございます。

唯今は同じ春の陽を仰がましても、身も心も何となう改まりま
して新しい希望の湧いて来るやうでございます。
文藝同人の皆様は、一々御手紙を差上げる事が出来ませんから

何卒、宜敷御傳へ下さいます。
末筆下ら皆々様の御幸福を遂に御祈り申上げて居ります。

48

三月五日

穂坂操

Q-43-B-1.

FAMILY INTERNMENT CAMP.

CRYSTAL CITY, TEXAS.

コロラド河に水鳥を見て

峰南生

コロラド河の河モスキード樹のさし出でたる陰に、さも樂しうに悠々と浮いてゐる水鳥。一見何の苦勞もなく欲するに何處へでも飛んで行ける自由の身。さぞ氣樂な生活のやうに思はれるが、然し彼等には彼等の不安があり、恐怖がある。一つ強敵から襲はれ、一つ弾丸の餌食となるかも知れぬ。彼等には寸時の油断も出来ぬのである。木蔭に端座して現在吾人の境遇に想到する時、或程度の自由は采餌されて居るけれども生存上に於ける不安は全然なく、水鳥を羨望する念はおのづと去りぬ。若葉萌え出す大森林の中を縫ふて流る、コロラド河の水面を見つめながら驚かす上には居られない。無我の境にあつた刹那、水鳥の羽音に驚かされ、我れにかへつた。



葉

邊

歌壇
刊著



水

若人より中かゝる道を行くもとて
おへふらうとていふを老ひたるこ

我々の世みらるゝやいつかモハベ野を
美望一視少くもはく

来りて復治祭やとちひ
いよの月にて神をたふさむ

考之凡雲

峯

逸

捕らひの沙漠のなををふらふ地
降るるやまを狭た板屋

元々まをふらふのみねと上
凡雲暗志 九内のもくり

峯々ばむらうに句ふ岩の山
部あふをせて野をみすみ

池のほとりへ歸りし夜の庭たずみ
 キヤンプの灯影ゆるらぐをきく
 降れり又ゆり通しある雨の夜子
 星まじりわね空澄みわたり
 音とあはれ深夜の闇を果ててふい
 とや擴かりて熱き手とあはれ
 あゝ息吹き大に止す似と表の積
 る世を招くかゝる夜はかり
 嗚りてあはれは空をりたふ
 美しきマリヤのいのちをまよ
 ユマの榛尔ころりやわねる

○

白水

あか
 開伽のあそびとすふにさき音子の
 くやうとるに夜の半路は 偲とる中
 大人あらは思ふりけりそ、宵の
 帷のすやすやおもひをさるや

半月のうげ 52
えかくれく

卯月

影空の下は起す伏す岩山に
いほのさやけとコバルトに

日多よりけななり一羽の小鳥来て
何がついそむや啼きなり

ゆゑか

雨のふか降りきたる花を灰色の
くも前の上をおひぬ

説
吾

常あられぬきよしあれとち遠く
いそぐ偏く子の父に

花のゆらポストに出るいそぐなり
いそぐ花軍一本をきつたりたる

雪をぬきユタは荒野は一夜ねて
木の花咲くいそぐと花思ふ

冬枯れのユタの盆地をさすゆけを
涯なくほくく雪の山脈

灰色の煙雲が俯ふソートレーキの
空は聳ゆるモルモン寺院

わが汽車はアイダホ入る夜更く水と
書、うもあふふ雪あかり

モンタナは雪をみそはすこまあふ
野山は川と怒り出さるる

吹雪するグラスゴ駅は降りまらて
山モンタナの人とふりまら

帰心

良

知

帰心と覚悟さるる
いふ引りたる昨日今日
ありふ水と悲しみ恨み
故郷の月やまたなん

犠牲

万骨は枯れて名もなき
時の犠牲をみとめざる

生けにへの尊きわみ
十字架の上のユスのみ

春雨

34

雨の音は軒端より春の音の如く
去の心なきかたき晝の一とき
降りつゝく雨は濡れぬ枝も樹も
青みを深きとて枝の如く
春風はねむす吹けを如月の
春をもたらすかこの様なる
春の情はとてあはれ山里に
一かゝり映るる草の如く

柳眉青柳

河みより画きとてのひかり柳の
眉みのわたりなきとて春風

春の如く

起保

春雨りしや春の如くユマの野を
花ももよほさる若みより
荒筋もや花の衣とて春の如く
春の如く染めわけ春岩山の如く

帰心

56

さき子

さき子よ又昨日の旅路今日も宿
明りを知らずいそいそとゆく

犠牲

さき子の身のいのちをはたらき親あるま
にさき子あらずさき子あらずのさき子

悲しみを女にさき子があらず村雨
うらむひそむくさき子の心か

うらむみより又暮れも然るさき子
さき子のさき子さき子のさき子

春意

天より帰る岩山の裾にもさき子のさき子
さき子さき子さき子さき子さき子

如月さき子さき子のさき子さき子
さき子さき子さき子さき子さき子

降る雨よいさき子さき子さき子
さき子のさき子さき子のさき子

榆の木の子枝よさき子さき子さき子

眠りもはそそを醒めや得たり
白楊ははやりし若葉つややく
濡れそそや月ふ家々の軒

植木鉢

紫田 雲

鈴ふあまを待てと芽の出ぬ植木鉢
希ふも日向は出してたずかむる

あはは去如物の空の夕人そるり
前々花園にやあかりする

コロド代河辺の柳、葉とりして
色とりとぐのあつたみり

山登りえいほもこをそそ歩ふ
吾等代キヤンプ三つにきり

そこの後の月、うけ流るる一人
思ひきりぬもふメスキ一の糸

ふはさやれ吉野、いのきくは花
夢もそそ通へアリゾナの糸

楠瀬氏を送りて

風戸の代子

氣あゝ清きふく通の糸ふれ

きみやひくらむ たるの辺り

國難はあらん けしきをきくげんや
ツールレーキは 解あすうらや

暴風

アリゾナの砂卷く風は 馴れずきと
あそもゆする 今もあらしは

強風を電線をつたに 打ちあがりて
嵐のキャンアをふり 吹まめくる

○

飛やけけ けしきを 浮ける 暁の
空よつた 物ま 目ま つか 添ふ

秀子

○

謎のうぶの子達を 道はゆたあひま
日系兵士の 多く ますけ けある

あつ 砂

海へも 行く 勇気と つかの 兵の
まじやかなる ちの 咽も

ツールレーキは

西 善

遙くとも 雪の心 領わけて 来去るは
ほめたかり 金網の 門

ホストンは考ふそむきと雲ふの記
ツールレーキに他はこころも
新しめぬ哨兵の瞳は遠をれ
素直にくる隔絶の門
此のふあとも巡り遇ふりもるぬ
わきまは身いと月くみませ
ふあふと思を置めて換るふ代
血脈は通ふ無言のわきま
戒嚴令解け表と聞けと敷かれぬ
友の獄舎に小雀啼きふ

○

山田きみ

遠征のすおん子をおもふ母その
子人針は一針をさくころ
おと針はそみふの赤糸くあう
棒けそ祈らむつがふれと
千里ゆき千里かへるといふ寅の
寅年の人を訪ふおん母
かみみは泣子の上をば言ひ合ひて

母なる女の、うれひそ物、うた

ツルレーキ

蘇井 加吉

金網の或まがやうなるキヤンプ、
たう漲り、うらうら、うらうら

是のつまつ、うらうら、うらうら、
罷の旅路の、うらうら、うらうら

健柳の山間老人、病弱、籠居の私共を
隣みて、遥なる山の麓より、白き草花の
美しきを、そなたに、うらうら、うらうら

虞、みの花、うらうら、うらうら、
ほのく、うらうら、うらうら、うらうら

月の夜、うらうら、うらうら、
うらうら、うらうら、うらうら、うらうら

癪を病みて

癪を、うらうら、うらうら、
うらうら、うらうら、うらうら、うらうら

痛み、うらうら、うらうら、
うらうら、うらうら、うらうら、うらうら

弱きも才浅くもわきまを失へらば
物にたみえねく昔比かすく

春 曙

やうにけれた朝の静寂の花くもり
をなす春の星も春のいとそおもふ
動乱の地軸のともてゆりあき日のく
光つるやまきはなをるなれと

某氏銀婚式を祝して

鴛鴦の契りをもせざば三千とせに
五とせさねぬのりこころと云

白銀のつづきをわきますきた
ちのちもあみあみなりたをむ

春のこころはひさしのころけけ花むら
あみくも思ふこそ銀の盃

宇宙の世のちまうや深き銀婚は
あいのちをわきまをひかすま

友白髪のことゆく今日のつどひをば
とあやふくあふふ白銀の杯

良知

全

とあ子

きんみ

善光

二世徴兵合格者に與ふ 普光

62

生れ來てゐるが、いふ多かりし身をさへく
たせあき、いふは男子あらずや

春 魚

冬をぬきぬぎ、うねり、あかともを
エマ、いふいふ、いふ、いふ、いふ、いふ

六六をともるか、迷ひエマの脚、
醒めやらぬまや、まのあか、まの

付、三民子を送る

遠く、あつと、銭、あつと、銭、あつと、銭、
あつと、銭、あつと、銭、あつと、銭、

あつと、銭、あつと、銭、あつと、銭、
あつと、銭、あつと、銭、あつと、銭、

正誤 三月号外頁趣味の歌心の缺字を補ふ
殊更趣味、いふものを無きやれども
四季をり、いふ心、満ちたり

欄の古歌集

諸の院にて欄を足て詠めり（古八集）

あの中よりあてきく鳥のふりせはあめ心ものかけうら
花盛なりよあを足やりて詠めり

足はきく柳きくをきくを都るあめ錦なりを
素性法師

題知らず

大友黒主

あの中よりあてきく鳥のふりせはあめ心ものかけうら
亭子院の帝の歌合（拾遺集）に歌一

素性法師あるよ（拾遺集） 紀 母之

欄の古歌集 下凡をきくを都るあめ錦なりを
凡河内躬恒

三十六人果屏風之歌

あの中よりあてきく鳥のふりせはあめ心ものかけうら
子にまかりあてきくはべりては（拾遺集）

中 終

あの中よりあてきく鳥のふりせはあめ心ものかけうら
63

田融院の時三人の事屏風は花の本より下に人々
集りて花をとりて（拾遺集）平 兼盛

世の中は花の如きものと思ふも花を暮す心ありて

題 知らる

孫永実方彩臣

桜狩雨をふりきぬあづきのねもとも花の蔭をやとむ

題 知らる（後拾遺集）紫 式部

世の中を何歎かき山をめぐりて花を暮す人の心ありて

修りしあやかし給ひけりやとくらふ花の咲きたる
下に休みたまりて 詠りせたまりけり

花 山 院

木のむかしは水とす水々あつたつた花を人よりけり

甘路花の心を詠めり（金葉集）

孫永長実卿母

春にとに国をさく良花を連り惜しむ心もけり

水 辺 彦 宅

後永極廉政太政大臣良経

桜咲きし日の山風吹くまに花はなかりゆく志賀の浦波

（新古今集）

編輯室便り

△橋瀨氏より鶴岡同人雜誌初刊鉄柵を御寄贈くださいます。有難く御礼申上げます。

△吾の文藝同人モハベ誌の客員として多大なる御聲援と御鞭撻を賜はつた原田松鶴岡徳太郎の両氏は今回外部に移住されることになりました。今日迄の御厚情を深謝すると同時に今後益々御健康に注意され情操の源である文藝に精進する。層の御指導くださることを御願ひする次第であります。

△今回三百七区内山勝三氏に本誌客員を承諾くださいました。上沢山の御寄附を頂き又相墨夫人よりも御寄附を頂きまして厚く御礼申上げます。

△郵便物は紛失の恐れがあります。SITAMANE, 317-91D PISTON AREA.

△客員

第一館府 永井正吉氏、西野信太郎氏、正木良夫氏

第二館府 田住隆助氏、長谷川宗一氏、西真砂様、風戸登代子様

第三館府 中島時次郎氏、原田徳三氏、鶴岡徳太郎氏、明野普光氏

△取次所

第一 正木氏、文藝協会、料理学校井上氏、第二、長谷川氏、田住氏、風戸夫人、第三、文藝同人社内

△事務所の入口に投書函を設けました。御遠慮なく御投稿下さい。編輯 山根貞蔵

